

# 子育て中の母親はどのようにして対人関係を拡げるのか？

## －「社会的代理人」利用状況の自由記述を用いた探索的検討－

片桐咲恵<sup>1</sup>・西村太志<sup>2</sup>・古谷嘉一郎<sup>3</sup>・相馬敏彦<sup>4</sup>・小杉考司

How do mothers with preschool children expand their social network?

－The explanatory investigation of situations in which mothers use their important others as “social surrogates”－

KATAGIRI Sakie, NISHIMURA Takashi, FURUTANI Kaichiro,  
SOMA Toshihiko and KOSUGI Koji

(Received September 30, 2016)

### 1 はじめに

近年、子育て支援に関する取り組みが各自治体で積極的に行われている。例えば広島県では、子育てポータルサイト「イクちゃんネット」を通して県内の子育て支援施設やイベントに関する多様な情報提供を行っている。また、大分市では子育て支援サイト「naana（なあな）」において、子育てに関するイベントや行政のサービスなどの情報を発信している。このサイト内では情報発信だけでなく、交流サイトもリンクされており、子育て中の母親同士が気軽に相談し合えるような場が提供されている。さらに、山口県は「やまぐち子育て連盟」事業を推進している。この事業では「企業、地域、行政等が協働して、若い世代が希望を叶え、安心して結婚し、妊娠・出産、子育てが出来る切れ目ない支援を県民運動として展開し、社会全体で子どもや子育て家庭を支える気運の醸成を図ること」を目的とした様々な活動を行っている（山口県，2016）。このように、子育てを支援するさまざまな取り組みが行われているが、現状では子育て環境に対して人々から肯定的に評価されることはあまりない。例えば西村（2013）は、内閣府の調査結果を踏まえ、社会全体としては、人々は子育て環境を十分満足できるものではないと評価していることを示している。また、丸山（2013）は、性別役割分業を伴う核家族化の進展、地域コミュニティや親族ネットワークとの関係の希薄化による子育ての個別化、私事化を、乳幼児を育てる母親への過重な負担と育児不安が社会問題化している背景として挙げている。

このように子育て中の人々が、子育て環境に対し肯定的な評価をできない場合がある。さらには、子育てを母親のみ、夫婦のみで行うことは、経済的、時間的に非常に厳しいため、周囲の子育て環境に頼らざるを得ないのが現状である。実証的な研究においても、落合（1989）は、親族・地域・諸機関を巻き込む育児ネットワークに支えられて初めて育児は可能になって

<sup>1</sup> 山口大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校臨床心理学専修

<sup>2</sup> 広島国際大学心理学部心理学科

<sup>3</sup> 北海学園大学経営学部

<sup>4</sup> 広島大学大学院社会科学部研究科

いると考えた方が現実に近いと指摘している。一方、このような状況を打開する策として牧野（1982）は、母親の育児不安を解消する条件として、母親自身が持つ社会的人間関係の拡がりの重要性を指摘している。さらに、親同士の情報交換や保育施設の質の充実を図るためにも施設や機関によって形成されるフォーマルなネットワークとともに、友人や親族とともに自ら形成するインフォーマルなネットワークも親や子供にとって重要となることも示唆されている（久保, 2001）。

これらのことから考えると、子育て環境に関する問題を解決するための1つの答えは、多様なサポート・ネットワークを有することであるだろう。しかしながら実際には、妊娠から出産にかけては、出産前に有していたネットワークを母親が失ってしまうことが明らかになっている（森永・山内, 2003）。こういった縮小されたネットワークを改善することは、サポート源の増加につながり、母親の適応を向上させる可能性を高めるだろう。現在、子育て中の母親への負担が多く問題となる中、それらを解消する1つの試みとして母親を取り巻く社会環境、つまり母親の持つネットワークに着目した検討は、以下の2つの意義を持つと考えられる。第1に、ネットワークに着目した検討を行うことで、子育て中の母親はどのような対人環境を有し、そしてどのようにして子育てしているのかを具体的に理解できる。第2に、母親を取り巻く社会環境に着目した検討は、子育て中の環境改善に役立つアプローチへの足掛かりとなる。しかし、対人関係構築についての文脈は量的な調査からは難しく、具体的な内容を把握するためには質的なデータからの検討が必要である。そのため、子育て中の母親の具体的な他者との交流、ネットワーク構築に関する行動を検討するために、実際の母親の経験を自由記述で回答を求め、文脈を踏まえた調査が必要であると考えられる。

以上のことから本研究では、多様なネットワーク・サポートを有するための母親の行動として「社会的代理人」(後述)に着目した検討を行う。具体的には、多様なネットワークを再構築し、子育てにとって望ましい対人環境を築くため、母親はどのような行動をとるのかという問いについて、社会的代理人をどのように活用しているのかという観点から考える。特に、対人資源を拡げる他者として社会的代理人を仮定したうえで、出産後の母親の対人関係の拡充過程について検討する。また、その社会的代理人の活用は意図や計画性がなければ困難と考えられることより、母親における社会的代理人の計画性、社会的代理人活用に対する負担感、待望感も確認する。

### 1-1 「社会的代理人」仮説とは

「社会的代理人」仮説とは、Bradshaw（1998）が提唱したものである。それによると、対人関係の構築に苦手意識をもつ人が就職や入学など新規の対人関係を拡げる必要がある場合、既知の人物（＝社会的代理人となる人物）をその場に伴う戦略をとる。そうすることで、その状況への不安などを低減させ、社会的代理人が相互作用を支援し、対人関係を拡げることができるといふ。社会的代理人の存在が対人関係の構築に及ぼす影響について、いくつかの実証的な検討がされている（e.g., Bradshaw, 1998 ; Boucher, E.M., & Cummings, J.A., 2014）。

筆者らはこの仮説に着目し、全国の母親を対象とした調査を行った。対象者の選定にあたって、養育している子どもを未就学児に限定した（Nishimura, Katagiri, Watanabe, Furutani, Soma, & Naganuma, 2016）。Nishimura et al.（2016）は社会的代理人として配偶者の利用を規定する要因の検討を行い、高い夫婦関係満足度、平等的性役割観の低さ、シャイネスの低さ、関係不安の高さが、配偶者を社会的代理人として利用することを規定することを示した。さら

に、配偶者は「社会的代理人」として優先的に選択されやすいことも明らかになっている（片桐・西村・古谷・相馬・長沼, 2016）。片桐ら（2016）は、「社会的代理人」として配偶者、配偶者以外の家族（配偶者の親、自分の親、配偶者のきょうだい、自分のきょうだい、配偶者の親族、自分の親族）、友人・知人（出産前からの友人、出産後子育てをきっかけにできた友人、出産後子育て以外のきっかけでできた友人）というカテゴリーを設定し、「社会的代理人」利用の多様性について検討を行った。その結果、配偶者、自分の親、自分のきょうだい、配偶者の親、出産後子育てをきっかけにできた友人、自分の親族、配偶者のきょうだい、出産前からの友人、配偶者の親族、出産後子育て以外のきっかけでできた友人の順に「社会的代理人」として利用されやすいことが示された。伊藤・相良・池田（2007）は、子育て期において女性は社会生活から切り離され、コミュニケーションする相手が配偶者に限定されやすいと指摘している。これは、片桐ら（2016）により示された、配偶者が「社会的代理人」として優先的に利用されやすいことと同様に考えられる。一方で母親が、誰を「社会的代理人」として伴い、どのような場所で、どのような過程を経てネットワークを構築していたかということは確認されていない。そのため、本研究では、Nishimura et al. (2016) のデータのうち、社会的代理人となる対象別の利用状況に関する自由記述について詳細な分析を行う。このことによって、子育て期の女性の対人関係の拡大が、周囲の他者を利用してどのように展開されているのかを示すことが可能になる。

## 1-2 「社会的代理人」となる人物

上記のように配偶者は「社会的代理人」として利用されやすい。一方で本研究では、「社会的代理人」となる母親の周囲の他者として、コンボイ・モデル（Kahn and Antonucci, 1980; 岩田, 1995）に基づく他者設定を行う。コンボイ・モデルとは母親を中心に周囲の他者が心理的距離に応じて同心円上に広がっているモデルである。母親に一番近い第1同心円上には配偶者や親友など、第2同心円上には家族や親戚など、第3の同心円上には遠い親戚や職場の同僚などがあげられている。このコンボイ・モデルに基づき、「配偶者」のみならず、「配偶者以外の家族（配偶者の親、自分の親、配偶者のきょうだい、自分のきょうだい、配偶者の親族、自分の親族）」、「友人・知人（出産前からの友人、出産後子育てをきっかけにできた友人、出産後子育て以外のきっかけでできた友人）」について検討を行う。以上のことを踏まえ、本研究の目的は次のようにまとめられる。すなわち、3つの対象他者（配偶者、友人・知人、家族）を「社会的代理人」とし、子育て中の母親の「社会的代理人」の対象者ごとのネットワーク拡大過程の検討することである。

## 2 方法

### 2-1 調査概要

2015年10月に実施されたオンライン調査によって得られたデータを本研究の目的に即し、分析を行った。調査対象者は（株）クロスマーケティングが保有するモニターのうち、調査依頼に応じ、既婚者で配偶者と同居しており、就学前の子どものみを養育している女性600名を対象とした。

### 2-2 調査内容

#### (1) フェイスシート

対象者の特性を捉えるために各質問項目への回答を求めた。各質問項目の内容は、年齢、性別、現在の婚姻状況、養育中の子どもの人数とそれぞれの子どもの性別と年齢（6歳未満を対象）、また6歳の場合は就学しているか否か、調査参加者の職業、現在の産休・育休取得の有無、同居人数、居住都道府県である。

## (2) 対象ごとの社会的代理人としての利用の有無とその内容の自由記述

本研究は人とのつながりの変化についての調査であることを明記し、「子どもが生まれ、子育てをすることをきっかけに、あなたがあなた自身の人とのつながりをどのように変化させていったのかというご自身の経験についてお聞きます」と教示をした。そして、配偶者、配偶者以外の家族、友人・知人、子どもに関して、母親自身の子育てに役立つ人とのつながりを増やすために一緒に行動したことがあるか否かを尋ねた。また、一緒に行動した経験がある場合には具体的な内容を自由記述（150字以内）にて回答を求めた。なお、配偶者以外の家族には、配偶者の親、自分の親、配偶者のきょうだい、自分のきょうだい、配偶者の親族、自分の親族を選択肢として設定し、複数ある場合は最も印象に残っている経験を記入するよう教示を行った。また、友人・知人に関しても、出産前からの友人、出産後子育てをきっかけにできた友人、出産後子育て以外のきっかけでできた友人を選択肢として設定し、同様に最も印象に残っている経験について記入を求めた。また、経験を記入してもらった後に、その経験について評価を尋ねた。評価内容は、「その経験は前もって計画を立てて行った」、「その経験はとても負担であった」、「その経験を待ち望んでいた」の3項目である。なお、「自身の子ども」の社会的代理人としての利用の有無やその内容については、道具的サポート源としての機能的性質が異なると考えられるため今回の分析対象からは除外した。また、「社会的代理人」を用いて行動する際の特徴として、「その人物と一緒にいると落ち着くことが多かった」、「その人物は誘うといつも一緒に行ってくれた」、「その人物は私の人とのつながりを増やすために役立つ人物であった」の3項目を尋ねた。この3項目は本研究の分析には用いていない。

## (3) その他の変数

子育てに関わる専門家（医師、保健師、助産師、看護師、保育士/幼稚園教諭、子育て広場などの職員）が社会的代理人として機能し得るか否かの評価を尋ねた。さらに、自尊感情（内田・上埜,2010）、特性シャイネス（相川,1991）、青年・成人期の愛着スタイル（金政,2013）、夫婦関係満足度（諸井,1996）を測定した。また、平等主義的性役割態度スケール短縮版（鈴木,1991）、Parental Oivervaluation Scale（Brummelman, Thomaes, Nelemans & Bushman, 2014）を翻訳したもの、関係流動性（Yuki, Schug, Horikawa, Takemura, Sato, Yokota, & Kamaya, 2007）、居住流動性（Oishi,2007）を参考に引越しの回数、居住形態、居住年数、地域の特徴、自分の親と配偶者の親の居住地域を調査した。なお、これらの変数は本研究の分析に用いていないため詳細は割愛する。

## 3 結果

調査依頼に応じ、既婚者で配偶者と同居しており、就学前の子どものみを養育している女性600名のうち、回答に倫理的矛盾が含まれていたものを除く545名（平均年齢：30.60歳，21～46歳）を分析対象とした。なお、本研究では自由記述のデータ、社会的代理人と共に行動した経験の評価を尋ねたデータを用いた。

### 3-1 「社会的代理人」としての利用の有無

既に述べたように、母親545名を分析対象とした。配偶者、配偶者以外の家族、友人・知人を「社会的代理人」としての利用の有無を表1に記した。

表1. 各対象者に対する「社会的代理人」としての利用の有無（人数）

|          | 利用したことがある  | 利用したことがない  |
|----------|------------|------------|
| 配偶者      | 293 (53.8) | 252 (46.2) |
| 配偶者以外の家族 | 268 (49.2) | 277 (50.8) |
| 友人・知人    | 280 (51.4) | 265 (48.6) |

※全体N=545, ( ) 内の数値は割合を示す

表1により、約半数の母親が各対象者を「社会的代理人」として利用しており、母親自身の人とのつながりを増やすために一緒に行動していたことが確認された。次に、社会的代理人として各対象者を利用したか否かについて、各カテゴリーに属する回答者数について二項検定を実施した。その結果、いずれにおいても有無の人数の違いは認められなかった。

### 3-2 「社会的代理人」となる対象ごとの行動内容についての自由記述の検討

次に、配偶者、配偶者以外の家族、友人・知人を伴った経験の自由記述を形態素解析し、集計した。分析にはKH coder（樋口,2014）を用いた。抽出語（上位30）の度数分布表を表2に示した。また、使用した語句の品詞は名詞、サ変名詞、形容動詞、固有名詞、人名、副詞可能、動詞、形容詞、副詞である。さらに、自由記述の内容においては、同一の意味を表す語句であっても表現が異なる（例：子ども、息子など）場合がある。そのため、語句の取捨選択、コーディングを行ったのち、集計した。なお、出現回数のはべ数である。

表2. 上位30の抽出語句と出現回数

|    | 抽出語  | 出現回数 |    | 抽出語  | 出現回数 |
|----|------|------|----|------|------|
| 1  | 子ども  | 586  | 16 | 支援   | 106  |
| 2  | 行く   | 318  | 17 | 近所   | 95   |
| 3  | 一緒   | 277  | 18 | 知り合う | 95   |
| 4  | 子育て  | 213  | 19 | 情報   | 93   |
| 5  | 友人   | 210  | 20 | 交流   | 91   |
| 6  | 配偶   | 201  | 21 | イベント | 90   |
| 7  | 地域   | 199  | 22 | 休日   | 85   |
| 8  | 参加   | 194  | 23 | 交換   | 81   |
| 9  | 公園   | 168  | 24 | 出産   | 75   |
| 10 | 母親   | 163  | 25 | 仲良く  | 67   |
| 11 | 遊ぶ   | 147  | 26 | 行う   | 61   |
| 12 | お話   | 142  | 27 | 年齢   | 59   |
| 13 | センター | 121  | 28 | 食事   | 59   |
| 14 | 実母   | 118  | 29 | サークル | 56   |
| 15 | 連れる  | 111  | 30 | 家族   | 53   |

出現回数が最も多かったのは「子ども」であった。社会的代理人となりうる人物の代名詞に関しては、友人、配偶者、母親という順で出現回数が多かった。次に、「地域」、「公園」、「センター」、「イベント」、「サークル」などの場も頻出単語の上位として現れた。その他にも、「交流」や「情報」を「交換」することなど、人とのつながりを増やす場のやりとりも確認された。

### 社会的代理人と抽出語句との対応分析

さらに、「社会的代理人」となる人物と自由記述から抽出された語句と社会的代理人の関連性（対応）を確認するため、対応分析を行った。その結果を図1に示した。なお、四角で囲まれた語句は社会的代理人として設定した人物、丸は抽出された語句（差異が顕著な上位50語）である。社会的代理人として設定した人物に近く付置された語句は、その人物と強く関連していることを示す。

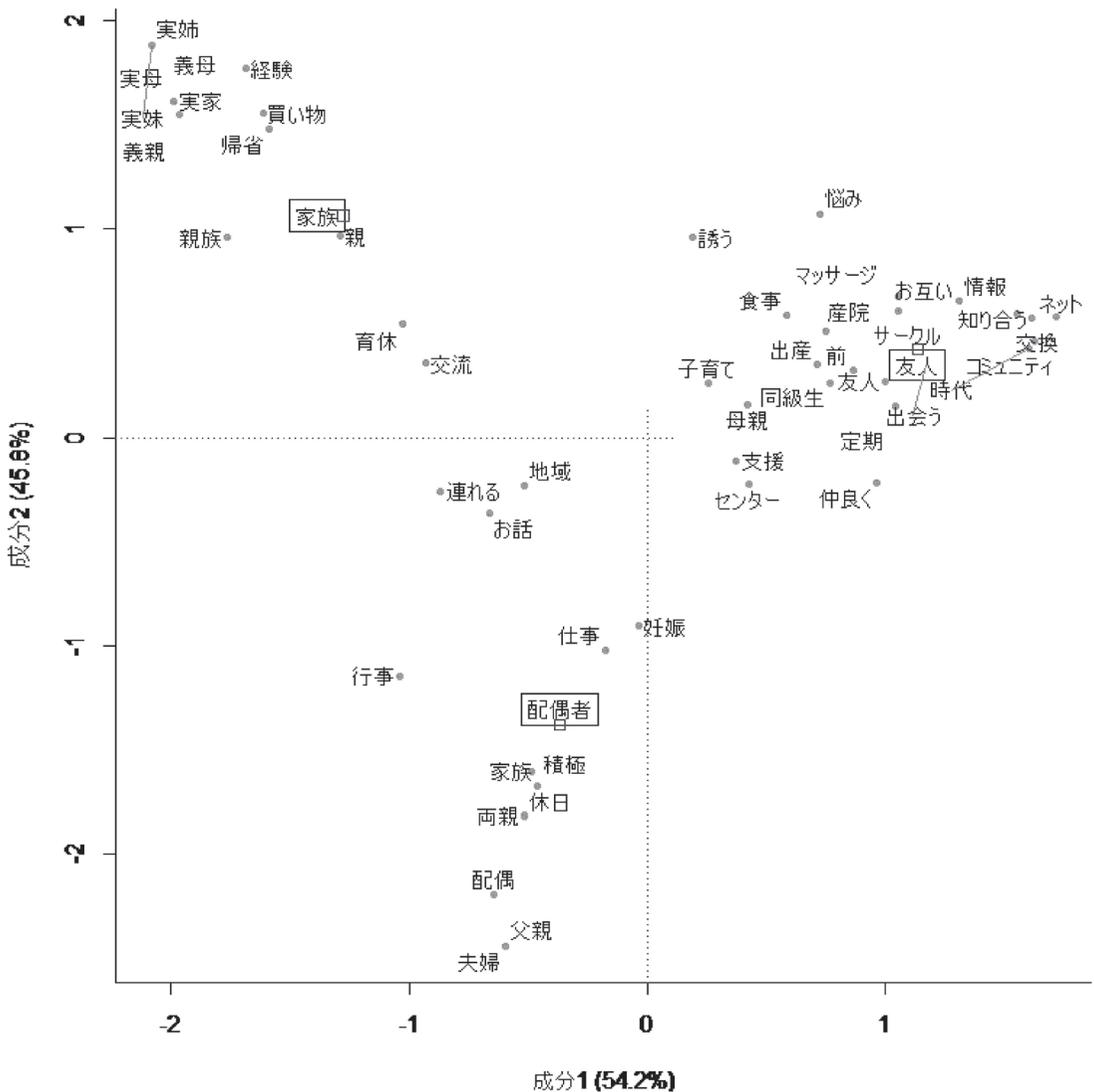


図1 対象者と抽出単語の対応分析

図1より、配偶者とより関連するものとしては、「妊娠」、「仕事」、「休日」などの単語が確認された。配偶者以外の家族では、「帰省」、「育休」、「交流」、「買い物」などの単語との関連が示された。友人・知人に関しては、「同級生」、「サークル」、「コミュニティ」、「情報」、「交換」などの単語との関連が確認された。

また、抽出された語句がどのような文脈で用いられたか具体例を確認するため、抽出された語句を含む自由記述を社会的代理人（対象者）ごとに2例ずつ示した（表3）。

表3. 抽出語句を含む自由記述内容

| ID | 母親の年齢（歳） | 対象者 | 自由記述内容                                                                 |
|----|----------|-----|------------------------------------------------------------------------|
| 1  | 29       | 配偶者 | 旦那が休みの日に、子供を連れて公園に行き同じような年代の子供を連れてご家族と一緒に遊んだ。                          |
| 2  | 28       | 配偶者 | 私と夫が仕事の休みの日に、支援センターのイベントに参加した。顔見知り程度にはなったが、連絡先は知らない。                   |
| 3  | 29       | 家族  | 育児休業中、子供の人見知りを軽減させるため、私の叔母と一緒に、ショッピングモールの子供が遊ぶスペースに出掛けた。               |
| 4  | 28       | 家族  | 引っ越したばかりの地域で母と一緒に公園に行った。母は来ている人に気軽に話しかけるのでその地域の幼稚園や公園の情報を教えてもらうことができた。 |
| 5  | 29       | 友人  | 病院のプレママ教室で一緒だった人とお友達になり今でも定期的に情報交換したり子育て支援センターと一緒に遊びに行っている。            |
| 6  | 26       | 友人  | 元同僚とお互いの子どもをつれて週1で支援センターへ行った。同年齢の子どもたちと遊ばせたり、支援センターの先生に相談事をしたりした。      |

表3より、母親は公園や地域の子育てサークルへ社会的代理人を伴い、他の養育者や子どもと交流を深めていたケースの存在が確認された。交流の中では、情報を交換したり相談事をしたり遊んだりといった活動があったケースが示された。

### 社会的代理人を伴う行動の計画性の有無について

社会的代理人行動について、計画性の有無を確認するため、各対象者と一緒に人とのつながりを増やした経験をもつ母親を対象に、自由記述で回答を求めた経験に計画性があったかどうかを集計した（表4）。なお、前もって計画をしていたという項目に対し「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した人を「計画を立てた」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」と答えた人を「計画を立てなかった」として集計した。

表4. 社会的代理人を伴う対人関係拡充経験の計画性の有無 (人)

|           | 配偶者 | 家族  | 友人・知人 |
|-----------|-----|-----|-------|
| 計画を立てた    | 136 | 107 | 152   |
| 計画を立てなかった | 81  | 79  | 60    |
| どちらでもない   | 76  | 82  | 68    |

表4に示した数値をもとに、各対象者について「計画を立てた」、「計画を立てなかった」、「どちらでもない」の人数で $\chi^2$ 二乗検定を行った。その結果、配偶者 ( $\chi^2(2)=22.70, p<.01$ )、友人・知人 ( $\chi^2(2)=55.66, p<.01$ ) で有意な偏りが認められた。配偶者の人数について、残差分析を行った結果、「計画を立てた」人たちの人数が有意に多いことが示された。友人・知人についても同様の結果であった。

#### 社会的代理人を伴う行動の負担感の有無について

社会的代理人を伴った行動について、負担感の有無確認するため、各対象者と一緒に人とのつながりを増やした経験をもつ母親を対象に、自由記述で回答を求めた経験に対し、負担感があったかどうかについて集計を行った(表5)。なお、負担であったという項目に対し「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した者を「負担であった」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」と答えた者を「負担ではなかった」として集計した。

表5. 社会的代理人を伴う対人関係拡充経験の負担感の有無 (人)

|          | 配偶者 | 家族  | 友人・知人 |
|----------|-----|-----|-------|
| 負担であった   | 32  | 22  | 25    |
| 負担ではなかった | 195 | 180 | 197   |
| どちらでもない  | 66  | 66  | 58    |

さらに、各対象者について「負担であった」、「負担ではなかった」、「どちらでもない」の人数で $\chi^2$ 二乗検定を行った。その結果、すべての対象者において $\chi^2$ 二乗値が有意であり ( $\chi^2 s>148.87, ps<.01$ )、残差分析を行った結果、「負担ではなかった」人数が有意に多かった。いずれの間にも有意な人数差が認められた ( $ps<.01$ )。以上より、対象者それぞれに関して、「負担ではなかった」と回答した人が多かったことが示された。

#### 社会的代理人を伴う行動の待望感の有無について

また、社会的代理人を用いた対人関係拡充経験を待望していたか確認するために、各対象者と一緒に人とのつながりを増やした経験をもつ母親を対象に、自由記述で回答を求めた経験に対し、待ち望んでいたかどうかについて、対象者ごとに表6に示した。なお、待ち望んでいたという項目に対し「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した者を「待望していた」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」と答えた者を「待望していなかった」として集計した。

表6. 社会的代理人を伴う対人関係拡充経験の待望感の有無（人）

|           | 配偶者 | 家族  | 友人・知人 |
|-----------|-----|-----|-------|
| 待望していた    | 168 | 127 | 194   |
| 待望していなかった | 40  | 37  | 20    |
| どちらでもない   | 85  | 104 | 66    |

さらに、各対象者について「待望していた」、「待望していなかった」、「どちらでもない」の人数で $\chi^2$ 乗検定を行った。その結果、すべての対象者において $\chi^2$ 乗値が有意であり( $\chi^2 s > 48.95, ps < .01$ )、残差分析の結果、各対象者に関して「待望していた」人数と「待望していなかった」人数について有意な人数差が示された( $ps < .01$ )。以上より、母親は配偶者、家族、友人・知人を介して、人とのつながりを増やす機会を待ち望んでいたことが示された。

#### 4 考察

本研究では、対人関係拡充過程において利用する社会的代理人の特徴を、「配偶者」、「家族」、「友人・知人」に着目し、社会的代理人利用行動について自由記述を用いて検討した。その結果、示されたことは以下3点である。(1) 各社会的代理人と場所や行動との間にいくつか対応関係が認められ、社会的代理人を活用する際の重要な要素として「共有・共通」が考えられる。(2) 母親が社会的代理人利用行動をとった結果、その後の関係維持にはばらつきが確認され、社会的代理人を伴う行動は人とのつながりを増やす1つのきっかけということが示唆された。(3) 母親の人とのつながりを増やすための行動意図として、子どもの利益となる交流の期待と母親自身の利益となる関係構築の2パターンが確認された。

まず、(1)について対象者ごとに考察する。配偶者においては、「妊娠」、「仕事」、「休日」に近い位置にあった。この理由として、これらの言葉は、夫婦が子育てにおいて物理的、時間的に共有する要素であったためと考えられる。例えば、共通の懸案事項である「仕事」、共同で子育てできる日が「休日」であることから一定の妥当性があるだろう。また、社会的代理人活用となるきっかけとして「妊娠」という語句が抽出されたのであろうが、これもまた、夫婦にとって共有する要素であるといえるだろう。配偶者以外の家族では「帰省」、「育休」、「交流」、「買い物」などが近い位置にあった。家族と共に過ごす場所と時間、そしてその行為が取り上げられたのではないだろうか。また、表4より家族に関しては社会的代理人として利用する際の計画性が、配偶者や友人と比べ認められなかった。この理由は、配偶者、友人・知人と比較して計画を立てずに依頼することができるためだといえるだろう。例えば、母親の親（祖母世代）がリタイアしている場合など、社会的代理人として依頼をすることは比較的難しくないと考えられるからである。一方で、「帰省」や「買い物」などの際に図らずも交流がもてたなど意図せずに社会的代理人を伴った行動を経験したこともあると考えられる。人とのつながりを増やすための行動か、結果として交流があったということなのか、社会的代理人として家族と共に行動した背景や行動意図について今後は詳細な検討で明らかにする必要がある。そして、友人・知人に関しては、「同級生」、「サークル」、「コミュニティ」、「情報」、「交換」などが近い位置であることが確認された。まず、友人・知人となるきっかけ、さらには友人・知人の要素として同級生、同じサークル、同じコミュニティメンバーであることが言えるのではないだろうか。加えてそのメンバー間で交換されるものが種々の情報であると考えられる。

以上の点から、社会的代理人を活用する際の重要な要素は「共有・共通」であると考えられることができる。つまり、社会的代理人と知り合うきっかけとしての「共有」、社会的代理人を活用する時や場の「共有」、子育てをする行為の「共有」といったように種々の点で母親は社会的代理人と「共有」しているものがあると考えられる。また、子育てイベントやサークルを企画する際、参加対象者や開催場所を工夫することにより、より母親対人関係を広げる行動が促進されることが示唆された。

次に、(2) について考察する。表3より、社会的代理人利用行動の結果、その後も関係が続いているケース (ID:5) もあれば、連絡先を交換するほどではなかったりその場限りだったりのケース (ID:2) も確認された。社会的代理人を伴った人とのつながりをふやすための行動は、継続的に行うということよりも初めの第一歩のようにきっかけとして機能することが考えられる。また、本研究の調査では社会的代理人利用行動を経験した際の子どもの年齢を限定して調査をしてはいない。そのため、子どもの年齢に応じた社会的代理人利用の特徴について縦断的な調査も必要である。一方森永・山内 (2003) は、出産後いずれの時期においても友人関係において1人に依存することなく多様な対人関係を持つことが適応を促進することを示唆している。このことから子どもの年齢や出産後の過程において、共通して多様な人間関係を持つことは重要だと言える。子どもの年齢に応じた社会的代理人利用の特徴の把握という課題は残るが、どの子育ての過程においても社会的代理人利用行動はきっかけづくりと成り得るだろう。

さらに表5より、社会的代理人を伴う対人関係構築経験が負担ではないと答えた母親が多かったことから、社会的代理人と距離が近いために、依頼することに負担がないためであると考えられる。また、すでに計画性があることを考慮するならば、計画が決定している時点で負担感が幾ばくか低いのもかもしれない。また表6より、配偶者や家族、友人・知人を介して人とのつながりを増やす機会を待ち望んでいた母親も多かったことから出産等において対人関係が縮小したためであるといえるだろう。しかしながら、実際に積極的に活動を行うのは、子育てをしている以上困難である。そのため、母親自身が動かなくても対人関係拡大の機会を増やしてくれる社会的代理人の存在は役立つものであるといえるだろう。社会的代理人利用行動は1回限りでも、その後も関係が続くにしても、母親の不安を和らげ、対人構築のきっかけに貢献できると考えられる。

最後に (3) 人とのつながりを増やすための行動意図について考察する。すでに述べたように人とのつながりを増やすための行動か、結果として交流があったということなのか、社会的代理人と共に行動した背景や行動意図について今後は詳細な検討で明らかにする必要がある。一方で本研究での自由記述を検討することで、子どもの利益となる交流の期待と母親自身の利益となる関係構築の2パターンが確認された。相戸 (2001) によると、子育てネットワークの参加理由として「母親自身のストレスや孤立した子育て環境の打開の為」と答えた母親が40%、「子どもの発達において文化や交流が必要と思った」と答えた母親が36%と、大きく2つの理由が示されている。本研究においても、子どもの人見知りを軽減させるためというケース (ID:3) のように子どもの利益となる交流を期待した行動意図が確認された。母親自身の利益となることで、母親が安心でき結果として子どもにも利益となることも考えられ、2つは切り離せないかもしれない。しかし、子育てにおける人とのつながりを考えた際に、人とつながることで母親は何を求めているのか、何を得ているのか、今後も詳細な検討が必要である。

以上より、対人関係を拡充したい母親にとって、社会的代理人は計画的に活用され、負担を

感じにくい他者であるともいえる。また、その社会的代理人となり得る配偶者、家族、友人・知人は場所や時間、行為の「共有」がその活用のきっかけや活用の場となっているといえるだろう。このことから、子育てイベントやサークルを企画する際、参加対象者や開催場所を工夫することにより、より母親対人関係を拡げる行動の促進が期待できる。さらに、社会的代理人利用行動は、母親自身だけでなく子どもにとっても利益のあることであり、子育て中の母親にとって子育てしやすい環境の一つとして自身の対人関係を構築するきっかけとなるだろう。

## 5 引用文献

- 相川充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62,3,149-155.
- 相戸晴子 (2001). 子育てネットワークの必要性和課題について-筑豊子育てネットワーク活動事例より- 日本生活体験学習学会誌 創刊号, 71-80.
- Boucher,E.M., & Cummings,J.A.(2014). Revisiting the social surrogate hypothesis: Social anxiety and recruiting others for social events. *Journal of Social and Clinical Psychology*,33,7,653-672.
- Bradshaw,S.D.(1998). I'll go if you will:Do shy persons utilize social surrogates? *Journal of Social and Personal Relationships*, 15,651-669.
- Brummelman,E., Thomaes,S., Nelemans,S.A., Orobio de Castro,B., & Bushman,BJ.(2014). My Child Is God's Gift to Humanity:Development and Validation of the Parental Overvaluation Scale *Journal of Personality and Social Psychology*, 2014,1-15.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2007). 夫婦のコミュニケーションが夫婦関係満足度 に及ぼす影響—自己開示を中心に— 文京学院大学人間学部研究紀要, 1-15.
- 岩田美香 (1995). 育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク 北海道大学教育学部紀要, 68,191-233.
- 金政祐司 (2013). 青年・成人期の愛着関係での悲しき予言の自己成達は友人関係でも成立するのか？ パーソナリティ研究, 2,168-181.
- 片桐咲恵・西村太志・古谷嘉一郎・相馬敏彦・長沼貴美 (2016). 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する規定要因の検討 (2) 第57回 日本社会心理学会発表抄録集.
- 久保桂子 (2001). 働く母親の個人ネットワークからの子育て支援 家族家政学会誌, 52,135-145.
- 牧野カツ子 (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞ 家政教育研究所紀要, 3,34-56.
- 丸山美貴子 (2013). 育児ネットワーク研究の展開と論点 社会教育研究, 31,11-21.
- 松田茂樹 (2001). 育児ネットワークの構造と母親のWell-Being 社会学評論, 52,1,33-49.
- 松田茂樹 (2008). 何が育児を支えるのか：中庸なネットワークの強さ 勁草書房
- 森永今日子・山内隆久 (2003). 出産後の女性におけるソーシャルサポートネットワークの変容 心理学研究, 74,5,412-419.
- 中村真弓 (2006). 幼児をもつ母親のネットワークに関する一考察 日本教育学会大会発表要綱, 65,114-115.
- 西村 太志 (2013). 子育てとコミュニティ 加藤潤三・石盛真徳・岡本卓也 (編著) コミュニティの社会心理学 pp.127-148 ナカニシヤ出版
- Nishimura Takashi., Katagiri Sakie., Watanabe Aki., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko ., &

- Naganuma Takami. (2016). Who uses their spouse as a “social surrogate”? A study of the social surrogate hypothesis as regards social network expansion among mothers with preschool-aged children. Poster presented at 31st International Congress of Psychology (ICP 2016) .
- 西村太志・片桐咲恵・古谷嘉一郎・相馬敏彦・長沼貴美 (2016). 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する規定要因の検討 (1) 第57回 日本社会心理学会発表抄録集.
- 諸井克英 (1996) . 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 1, 15 - 30.
- Oishi, S., Lun, J., & Sherman, G D. (2007). Residential mobility, self-concept, and positive affect in social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 131-141.
- 落合恵美子 (1989). 現代の乳幼児とその親たち：母子関係の神話と現実：三沢謙一他 (編) 現代人のライフコース, 1-53 ミネルヴァ書房.
- Soma Toshihiko., Ura Mitsuhiro., Isobe Chikae., Hasegawa Koji., & Morita Akiko. (2008). How do shy people expand their social networks?: Using social surrogates as a strategy to expand one’s network. *Asian Journal of Social Psychology*, 11, 67-74.
- 鈴木淳子 (1991). 平等主義的性役割態度：SESRA (英語版) の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較 社会心理学研究, 6, 80-87.
- 内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 2.
- 山口県やまぐち子育て連盟  
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a13300/kosodaterenmei/portalsite.html> (2016/09/30閲覧)
- Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. CERSS Working Paper Series, 75.

---

<sup>i</sup> 広島県 <http://www.ikuchan.or.jp/>

<sup>ii</sup> 大分市 <http://www.naana-oita.jp/>

<sup>iii</sup> 山口県 <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a13300/kosodaterenmei/portalsite.html>

<sup>iv</sup> 本研究で用いたデータは西村太志を研究代表とする、平成27年度「日本学術振興会科学研究費助成事業」の「子育て期の社会的ネットワーク拡充再構築のための『社会的代理人』の活用に関する検討」の研究事業の一環で得られたものである。